

7. 養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会

養護教諭のスキルアップと養護教諭像の醸成を目指した学びの会

I. 事業を計画した背景と目的

養護教諭には、学校という場でその職務を遂行するための様々な能力が必要とされる。養護教諭は、各学校に一名の配置である場合が多く、その職務内容は、校種、勤務学校の規模などにより大きく異なる。さらに、法制度の改正、時代のニーズにより職務内容を変えることや、国・県の方針を意識することも求められる。職務を遂行する過程で生じる課題について、小中学校では、近隣校との交流の機会（地域の養護教諭部会など）があるが、高等学校では、こうした機会も少ない。さらに高等学校では、生徒の生活地域は広域となり、扱う健康問題等も複雑になるため、より一層、相談者を得にくく、悩みや葛藤の共有も難しい状況となっている。このように、養護教諭が職務遂行において抱える悩みや葛藤は多様であり、さらにそれらを他者と分かち合うことや、十分な経験を持つ養護教諭への相談ができにくい現状がある。

岐阜県において養護教諭に対する現職教育としては、新規採用研修・6年目研修・12年目研修等が行われているが、一般教諭の研修に比べ研修回数等が少ないことや、指導養護教諭が身近にいない状況での研修になっている。職務遂行において抱える悩みや葛藤、課題の解決が研修の場だけでは解消できていないのではないかと考えられる。本学においても、卒業者交流会が開催されているが、養護教諭の卒後支援には、養護教諭の職務事情、養護教諭の悩みや葛藤に特化したディスカッションや、ベテラン養護教諭からの助言、そしてネットワークづくりまで視野に入れた支援が必要であり、現行の卒業者交流会では各々の課題を解決するまでには至っていない現状がある。

また、新規採用後、養護教諭としての経験を一通り終えた卒後4～6年目にあたる時期には、転任による職務変化を経験する時期であり、自身の養護教諭像を模索し始める時期でもある。この時期、各養護教諭にはスキルアップや、目指す養護教諭像の再検討が求められる。しかし、養護教諭自身に向上意欲があっても、前述した養護教諭の職務の特性から、スキルアップにつながる方法が見出せず、自分が描く養護教諭像を定めにくい現状がある。その結果、向上意欲の低下や、養護教諭の魅力さえも見失う場合も生じている。

これらのことから、卒後4～6年目となる養護教諭が、職務における悩みや葛藤を話し合い、またベテラン養護教諭の助言・講義を受けることで、自分自身の課題と今後の目標を見つけ、より広い視野で養護教諭の在り方を検討する機会とし、現職教育の充実にもつなげたい。

II. 事業担当者

本事業は、以下の教員で実施する。

育成期看護学領域：日比 薫 山本 真実

機能看護学領域：松本 訓枝

III. 事業（研修会）の企画

1. 養護教諭学びの会の開催

1) 目的

卒後4～6年目となる養護教諭が、職務における悩みや葛藤を話し合い、またベテラン養護教諭の助言・講義を受けることで、自分自身の課題と今後の目標を見つけ、より広い視野で養護教諭の在り方を検討する機会とする。それにより、養護教諭としてのスキルアップに向けた意欲を養う。また将来的には、自主的な勉強会等へと発展することを目指す。

2) 対象

経験年数4～6年目の養護教諭。希望があれば、卒業校・経験年数に問わず参加可能とした。本学の卒業生を含む、経験年数4～6年目程度となる養護教諭を対象に実施案内を送付し参加者を募った。今年度は岐阜地区・西濃地区を中心に送付した。

3) 実施方法

本学を会場として、学びの会を2回開催した。参加の有無について返信を依頼し、その際、職務に関する感想（悩み・葛藤を含む）、今後学びたいことを募集した。

研修時間は1回あたり3時間程度とした。実施内容は以下に示した。

- ① 自己紹介
- ② ベテラン養護教諭の講話 卒後4～6年目養護教諭の悩みや葛藤に関わる内容の講話を実施。
- ③ 悩みや葛藤、解決の方法等についてディスカッション。グループは、卒後4～6年目養護教諭とベテラン養護教諭、大学教員によって構成する。
- ④ 終了後アンケートを実施し、本会参加の感想、本会参加による仕事への意欲の変化、本会への

希望などについて意見を集める。

- ⑤ 教員とベテラン養護教諭で今後の方針について意見交流する。

IV. 研修会の実施

1. 実施内容

1) 第1回「養護教諭学びの会」

開催日時：平成28年10月29日(土) 13:30～16:00

プログラム：講話「養護教諭のスキルアップのために」

可茂教育事務所 西田 倫子 ・ 岐阜県中央子ども相談センター 大城戸 香織
グループディスカッション(経験年数別)

2) 第2回「養護教諭学びの会」

開催日時：平成29年2月11日(土) 9:30～12:30

プログラム：講話1「保健室で出会った子どもたちとのかかわりから」

美濃加茂市立山手小学校養護教諭 稲垣 章子

講話2「子どもの成長を促す養護教諭の見守り～虐待を受けた子どものへの関わり～」

岐阜県中央子ども相談センター 大城戸 香織

グループディスカッション(経験年数混在)

2. 参加者の状況

表1に地域別参加者の人数を示す。表2に校種・経験年数別参加者の人数を示す。

表1 地域別参加人数

	岐阜地区	西濃地区	可茂地区	東農地区	愛知	計
第1回 学びの会	6	4	5	1		16
第2回 学びの会	8	4	10	2	1	25

表2 校種・経験年数別参加人数

校種	経験年数	第1回学びの会				第2回学びの会			
		1～3年	4～6年	7～9年	10年以上	1～3年	4～6年	7～9年	10年以上
小学校		5	2	1	2	10	2	2	
中学校		2	1			5	3		
高等学校			2		1				2
特別支援学校						1			
計		7	5	1	3	16	5	2	2

3. 参加者の意見

1) アンケート調査結果

毎回、研修会の終了時に評価のためにアンケート調査を行った。質問項目は「研修会での学び」「研修会に対する意見」とし、自由記載で回答を求めた。1回目の学びの会では16名に配布し15名から回答が得られた。回収率は94%であった。2回目の学びの会では25名に配布し24名から回答が得られた。回収率は96%であった。参加者の意見をまとめたところ以下のような意見があった。

2) 学びの内容

学びの内容として、スキルアップの必要性への気付き・養護教諭像の醸成・課題解決へのヒント・悩み葛藤の共有等があげられた。

第1回「養護教諭学びの会」

<スキルアップの必要性への気付き>

- ・誠実に丁寧に子どもと関わること。それが養護教諭のスキルアップにつながり子どものためにつながる。
- ・自分の実践を重ねて、成果ができていところだが、それを結果・成果として示す必要があると感

じた。自身の実践を記録に残すこと、根拠を持って行動すること・伝えることの大切さを痛感したので今年度取り組む。

- ・「養教としてやっていることをいかに形に残すか」これが私の課題と痛感した。今一度毎日の職務を振りかえりたいと思った。

<養護教諭像の醸成>

- ・養護教諭ならではの悩みや、養護教諭の存在の意味・価値などについて思い悩むことは誰にでもあるが、子どもにとってはとても大切な先生でありやりがいのある職であることを改めて確認できた。
- ・組織の一員としての養護教諭の機能や求められる役割について考える機会となった。

<課題解決へのヒント>

- ・「子ども」視点や主体にした関わり方、職員への発信の仕方を具体的に学ぶことができた。
- ・発信する大切さを感じた。全職員に伝えた方が良いと思ったことと、子どもの成長に繋がっていくと感じることは職員会等で積極的に伝えていきたい。
- ・自分が SOS をだしてもらえる養教であるのかと自分の業務を振り返った。今までの対応をふり返り子どもたちにどう対応できるか考えてみようと思った。
- ・困っていることを先生方に話せて、解答を得られたことがとても良かった。視野が広がると解決の方法を考える余裕ができるのだと実感した。
- ・保健室登校の子に関わる中で抱え込みになりがちだが、毎週の会議で子どもの状態を伝えるなど、発信していくことが現状を変えるうえで大切なことだと学んだ。

<悩み・葛藤の共有>

- ・職務上の課題や悩みを共有すること、相談できたこと、助言が得られたことで解決の糸口が見つかった。視野が広がり、前向きに取り組もうという思いになった。知り合いが増えることが嬉しい。

第2回「養護教諭学びの会」

<スキルアップの必要性への気付き>

- ・養護教諭として、心に寄り添うことが求められている中で、児童・生徒にどのように関わっていくとよいか、担任の先生との関わり方、子どものつなげ方について自分の考えや対応を見つめ直すことができた。新たな方法を得るための学びを始めたいと思った。
- ・いろいろな経験のある養護教諭の先生のお話を聞き、自分のスキルアップを図りたいと感じた。
- ・学校に1人の養護教諭として、十分なことができていないなと思った。もっと知識をつけるために勉強したい。
- ・経験から学ぶことがたくさんあるとわかった。毎日の学びが、子どもの成長にも自分の成長にもつながるとわかり、情報をそのままにせず学びにしたい。

<養護教諭像の醸成>

- ・“養護教諭とは”“保健室とは”原点にかえる機会を与えていただいた。
- ・若い先生方の悩み、困り感は、経験を重ねた私達も同じです。失敗をしながらも、進んできた私達の経験が少しでも若い先生方の役に立てば嬉しい。
- ・養護教諭の関わりが子どもの発達の中の大きな存在で、保健室での発見や情報発信の大切さを学んだ。子ども達の幸せを願って、あらゆる手段で支援をする養護教諭は魅力のある職だと思う。私も、今の学校の子供達にとって一人の養護教諭なので、何か子どものためになる支援ができれば良いと思った。
- ・子どもの人生に関わっていくということを自覚して、子ども1人1人と丁寧に誠実に関わっていききたいと思った。
- ・子どもに対する気持ちや養護教諭としての専門性は何かということ等々、改めて色々と考えさせてもらうきっかけになった。自分の養護教諭としての信念も大切にしたいと思えた。
- ・養護教諭としての芯をもち、貫き続けること、言葉かけひとつにも気をつけて対応することが大切だと学んだ。何よりも、子どもが幸せになるためにという想いが行動につながると感じたので、こういう想いを大切にしたいと思った。
- ・学校の中にはいろいろな子どもがいる。その子たちにとって私は信頼できる大人になれているのだろうかとふり返る機会にもなった。子どもの未来、子どものために、動き、安心感をあげられる養護教諭になりたい。
- ・子どもの行動の背景をみるとともに、行動の意味を良さに変換して声をかける温かさと柔軟さを大切に、子どもの世界に自分も入り込める、子ども心を察することができる養護教諭になりたいと思った。
- ・一番印象に残ったことは“子どもの言動の背景に目を向ける”ということ。問題行動だけに目をむけてしまうのではなく、その児童の心の声をしっかりと捉えられる養護教諭になっていきたいと改めて感じた。いけないことは指導しつつも、その子の味方になってあげられる安心感を与えられる

存在であるために学ぶ必要があると感じた。

<課題解決へのヒント>

- ・私が今抱えている悩みのヒントがたくさんつまった研修会だった。具体例をたくさん使ったお話を聞くことができ、月曜からの仕事への力になった。
- ・発達障がい、またはその傾向がある子の言動に対して、その子の表面的な言動にしか目を向けていなかったなど反省した。関わる時間を取ることが難しい時もあるが、できるだけ多く子ども達と関わって、子どもの考え方、感じ方、その子の世界をキャッチしていきたいと思った。
- ・具体的に「こういう言葉がけをする」「こういう取組をする」という実践を教えていただいたので、明日から使える内容を学ぶことができた。
- ・3年目でまだ経験が少ない分、自分だったらどうするか考えながら聞くことができた。
- ・教室で過ごすことが難しく、保健室で過ごす子がいる時、他の先生にも理解してもらえる働きかけ、保護者の方への働きかけの仕方や、そのことが子どもに与える良い影響について学ぶことができた。実践できる力をつけていきたい。
- ・保健室での子どもとの関わりの中で、具体的な話を踏まえて説明していただいて、今まで、自分でも気づけなかった悩みや疑問に気づき、「今までモヤモヤしていたのは、自分はこう思っていたからなのか」「そうやって考えるのは自分だけじゃなかった」と思うことができ、自分の自信にもつながった。学びもでき、気持ちの整理もでき、とても良い研修ができた。

<悩み・葛藤の共有>

- ・一人職であるがゆえに悩みはつきもので、すぐに周りに相談できることは難しい。「学びの会」でいろんな悩みに共感したり、ベテランの先生の話聞いて勇気や、やる気を抱いたり、自分が養護教諭を目指した原点に立ち返れることができた。同じ職種の先生方と交流ができる場があるのはありがたい。
- ・校種が違う若い先生方との情報交換は、普段の自分の経験では味わえないことを教えていただき、目をむけなかった部分に気付かされることがあった。
- ・グループディスカッションがとても良かった。普段の悩みに対して新しい手立てを発見できた。
- ・普段の悩みを交流できる機会になり悩みが軽くなった。

3) 研修テーマ・研修内容の評価

第1回学びの会では、15名から回答があった。研修会のテーマ・内容ともに「良かった」は15名(100%)であった。次回研修会への参加希望は「是非参加したい」は15名(100%)であった。「スキルアップにつながる研修会を継続してほしい」「経験年数によって悩みや課題が異なるため、同じ課題をもつ人同士でのディスカッションを望む」といった意見があった。

第2回学びの会では、22名から回答があった。質問項目は1回目と同様にした。研修会のテーマ・内容ともに「良かった」は22名(100%)であった。次回研修会への参加希望は「是非参加したい」は21名(95.5%)、「できれば参加したい」は1名(4.5%)であった。どちらの回も良かったと回答する者の割合は高く、学びの会への期待は高い。

4) 今後学びたいこと

今後、学びの会で取り上げてほしいことを表3に示した。

表3 今後学びたいこと

保健教育	保健指導	集団指導の進め方	健康相談	不登校傾向のある生徒への関わり	
		指導案の作成		保護者・担任等との連携の在り方	
		中学生への生活習慣指導(歯科・睡眠)		情報共有の在り方	
		性教育		不登校、相談がある生徒に関わる時間の生み出し方、実施方法	
保健管理	救急処置	養護診断・傷の手当や事後措置		子どもへの言葉のかけ方	
		救急体制の作り方		スクールカウンセラーとのかわり方	
	保健管理	エビデン所持、インシュリン所持の子どもへの対応		発達障がい等の子どもの関わり	
		感染症予防対策		WISCについて	
		アレルギーへの対応等職員研修の実施方法		カウンセリングについて	
健康診断	アレルギーのある児童生徒への対応	保健組織活動		学校保健安全委員会の運営	
	就学時健康診断の実施に伴う職員の協力体制づくり		児童が主体的になる児童保健委員会の運営方法		
保健室経営		複数配置の業務分担	その他	職員との協同	教育相談場面、生徒指導場面での連携の在り方
		実践したいことをどのように企画するか		組織の動かし方	組織を動かし健康教育を進めるためのコーディネートの方
		来室者対応(身体的な訴えの見極め等)		保護者対応	処置の根拠の伝え方

V. 参加看護職の意見と成果

職務における悩みや葛藤を話し合いベテラン養護教諭の助言・講義を受けることで、自分自身の課題と今後の目標を見つけ、より広い視野で養護教諭の在り方を検討する機会になった。各学校に1名である養護教諭だからこそ、情報の収集や意見交換は重要であるが、つながりが広がって行かない現状がある。今回の研修を機に、校種や地域を超えた養護教諭同士の学び合いのネットワークづくりに発展する可能性が感じられた。これまでの経験年数別の研修等で得られた学びとは質の異なる学びであったことが参加者間で共有された。

今回の学びの会では対象者を経験年数4～6年目としたが、実際の参加者は経験年数3年未満が多かった。寄せられた執務に関する悩みや葛藤も、目前にある課題に対していかに改善していくか方法論を問うものが多かった。身近に指導者がいない状況であることが不安を抱えたまま執務にあたる現状を生んでいると考えられた。この時期をどのように過ごすかがスキルアップへの意欲や、その後のキャリア形成に大きく影響するのではないかと意見が出された。今後卒後3年目までの研修の充実を図る体制を構築していくことが課題であることを確認した。

養護教諭像を醸成するにあたり、モデルとなる養護教諭の存在は大きい。先輩養護教諭の実践に触れる中で、自身の子ども観・養護教諭観を揺さぶられる状況が生じるのではないかと考えられた。自身のこれまでを振り返ることや、これまでにない気づきを得ることを通して養護教諭像を模索していく過程が重要である。そうした過程がスキルアップへのきっかけになったり、養護教諭像の再構築に影響を与えたりしていることが確認できた。

養護教諭としてのスキルアップを図るうえでは、階層的に指導者を育てていく必要があるとの意見も出された。1校に1名である養護教諭であるからこそ校種や地域を越えた現職教育体制を整えていくことが必要であることについても意見を共有できた。

VI. 教員の自己点検評価

1. 実践の場にも与えた影響

講義やディスカッションにより自身の実践を振り返るきっかけとなり、児童生徒に対して養護教諭の責任を再確認している参加者が多かった。また、自身の養護教諭像を模索する姿も見受けられた。養護教諭に共通する課題に対して、相互研鑽を意図した展開が実施されたこともより達成感のある学びにつながったのではないかと感じられた。自身の職務内容の充実に向けて主体的に考え改善していく意欲につながったことは評価できる。

「教員は学校で育つもの」といわれ、資質能力を向上させるためには校内でのミドルリーダークラスの教員が、若手教員をメンターとして指導助言にあたるメンター方式の研修が行われている。しかし、1校に1～2名の養護教諭の場合、当該校の研修だけで実務能力の向上を図ることは難しい。今回の学びの会はメンター方式の研修に準じるものであったといえる。メンター方式での研修の効果を示す結果でもあった。また今回の講師を務めた養護教諭の「自身の実践を振り返る機会になり、どのように伝えることが若手の学びになるのかを考えた」という発言から、ミドルリーダーとしての経験を伝える機会を提供できたともいえる。

2. 本学の教育・研究活動にも与えた影響

今回の研修による養護教諭の学びを知ることは、養護教諭に関係する科目の充実・改善や、養護実習で何を学ぶかを検討していくうえで大変意義のあるものになった。基礎教育に当たる部分と実践をつないでいくための学修の在り方を考えるうえでの貴重な機会となった。また、卒業後の支援につながるだけでなく、広く現場の養護教諭との関係を作るうえでも有意義であった。

VII. 今後の課題、発展の方向

養護教諭に特化した学びの会を継続していくことは重要であり、本事業を実施することの意味は大きいことが確認できた。今後、スキルアップを図ることや、養護教諭像を醸成していくために会の内容を現状に近づけていくことが必要になる。様々な経験年数の養護教諭と一緒に学ぶことで、スキルアップへの意欲や、その後のキャリア形成を支援していくための体制に大きく影響するのではないかと感じた。卒後3年目までの研修の充実を図る体制を構築することも重要な課題だと感じた。

養護教諭のスキルアップには、現状の課題を解決するための方法論的な学びと、物事のとらえ方や考え方を変化させていくための論理的な学びの両方が必要であることが今回の振り返りの中で確認できた。経験年数の浅い養護教諭にとっては、課題解決のための具体的な方法を学ぶことが現時点でのスキルアップにつながっていることは否めない。経験年数に見合った内容で実践的な研修を行うことは養護教諭として基盤を作るうえで欠かせない。しかし一方で、今回の研修の参加者の多くが、経験豊かな養護教諭の実践に触れる中で、自分にはない視点に気付いたり、実践していることの意味や本質を考えたりする場面が見られた。こうした経験が思考を広げ自身で具体的な解決方法を見出すこと

につながっている。学びの内容を現状に近づけるために、経験年数別による学びの場と、経験年数が混在する学びの場を意図的に提供していくことが必要になる。実施の順序性や方法については今後さらに検討していく。また、現職教育の充実を図るために、学びたい内容を踏まえた研修を実施していくことや、地域単位でのミドルリーダーを育成する場の提供を図るなど、養護教諭の学びを支援するために地域の養護教諭と協働して取り組む事業にしていきたい。